

「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」の 比較問題について

五十嵐 恵太

はじめに

『論語』は孔子（B.C.551～B.C.479）とその弟子たちとの言行録であり、「仁」「礼」など、様々な要素を説明しながら、人はいかに生きるべきか、どのようにすれば政治がうまくいくのかなどを説いた書である。この『論語』という書物は古代中国で編纂された書であり、中国の歴代王朝の政治に大いに利用されただけでなく、日本をはじめとしたアジアにおいても、古代から現代に至るまで、その影響がうかがえる。『論語』の章句の中には、現代日本にも大きな影響を及ぼしている章句がいくつも存在する。孔子の言葉は短い言葉であるため引用しやすく、座右の銘として利用されるものも少なくなく、また、『論語』成立以後、中国をはじめとして、アジアにおいて様々な研究や解釈が行われている。

一方、孔子が『論語』の中で述べている言葉の中には、自製の言葉であったり、弟子たちへの咎めの言葉であったりするような、否定的なニュアンスを持つ文言も多い。おそらくその代表として挙げられる有名な章句が「巧言令色鮮矣仁」であろう。

仁や礼そのものについての研究は数多くあるが、筆者が注目している「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」の二句に関しては、慣例的に対句的表現であるとされているが¹⁾、これに対して学術的な比較検討があまりされていないのが現状である。

先行研究の検索には、中国思想宗教史研究会編『中国思想・宗教・文化関係論文目録』（国書刊行会、1976）などの論文目録のほか、「CiNii」「CNKI」

の論文検索および「NDLOPAC」の記事・論文検索を利用した。検索ワードには「巧言令色鮮矣仁」「剛毅木訥近仁」および「巧言令色」「剛毅木訥」および「鮮矣仁」「近仁」を用い、かつ表記ブレも考慮してそれぞれ検索した。その結果、「巧言令色」と「剛毅木訥」の比較検討の妥当性を主たる対象として研究した先行論文を発見することはできなかった。理由としては、該当箇所の子数が少なく簡便であるがゆえに、一般社会において慣用的に用いられる頻度が高いが、逆に学術的な興味関心が薄れていることが考えられる。

両章句を比較しようとする試み自体は、宦懋庸の『論語稽』や洪邁の『容齋隨筆』を代表に、とくに宋代以降の注釈書・研究書にみられる傾向がある。またその傾向は現代日本においても時折みられる。小論では、慣例的に対句のように扱われているこの二章句に関して、対句のように扱うことは果たして妥当であるのか、検討を加えたい。

「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」の二章句を対句として扱うためには次の二つについて検討しなければならない。一つ目は二章句の前部である四文字、「巧言令色」と「剛毅木訥」について、文法上・意味上対句として認めてよいのか、ということである。二つ目は、二章句の後部である「近仁」の「近」、「鮮矣仁」の「鮮」は対立表現として妥当なのか、ということである。上記二条件のうち、どちらかひとつでも成立しないならば、対句的表現として扱うことは妥当ではないといえるだろう。よって小論では、「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」を実際に比較検討することにより、このような慣例が妥当であるかどうかの考察を行うことを目的としたい。

なお、小論で記している『論語』の章句は、「重校宋本論語注疏附按勘記（嘉慶二十年広西南昌府學開雕）」『十三經注疏 七 論語 孝經 爾雅 孟子』（中文出版社、1971、以下「論語注疏」と略す）を底本とした。また、『論語』を含む小論中すべての読み下し文・現代語訳、また本文中の読点句読点については、特にことわりがない場合、便宜上引用体になっけていても筆者が独自に付した読み下し文・現代語訳・読点句読点であり、その場合（読み下し文）、（現代語訳）の記号を付した。

1 『論語』における対句論

中国の文章文化において、対句は不分離の物であるといえる。それは対句に関する決まり事を確立させる土壌を作り上げた漢詩の存在が大きいと言えるだろうが、それだけではない。漢詩が成立する以前に編纂された散文である『論語』においても、その傾向は顕著にみられる。もっとも、漢詩成立以前の、対句としてのルールが明文化されていない対句的表現のことを対偶表現とよんでいる。第1章では、古田敬一「論語の対偶表現」（『支那学研究』第36号、広島支那学会、1972、12～24頁）および、古田敬一『中国文学における対句と対句論』（風間書房、1982）を参考にしながら、『論語』における対句について概観していき、その基準を探っていくことにする。

古田氏によれば、「論語のなかの対偶表現は、約二百五十例ある。論語は約五百の章から成り立つから、平均して二章の一つは対偶的表現がある割合になる。」という（『論語の対偶表現』12頁、20～21行）。残念ながら対偶表現のある文章について具体的にどれを指すのかはどこにも記されておらず、検証が必要であろうが、この点は別の機会を設けたい。また『中国文学における対句と対句論』315頁3～8行に、

学而時習之、不亦説乎。

有朋自遠方來、不亦樂乎。

人不知而不愠。不亦君子乎。

右の対偶は、厳密に言えば各句の字数が不揃であり、内容もそれぞれ別のことがら三つ併記されているので、そもそも対偶とは言えないのであるが、しかし、大まかに見れば〈三句対〉の形式の対偶表現である。これを対句の萌芽として、初歩的形態として考えることは差支えないと思う。

とあるように、後世の基準で考えれば対句・対偶表現とは呼べない章句も含めて考えるのが『論語』を対句の観点から見たときの姿勢である。よって、少なくとも『論語』には多くの対句・対偶表現が存在しているということ

前提として論を進めていきたい。

古田氏は続けて『論語』の中に現れる対偶表現の特徴について述べている。そこには、

記憶したり口誦したりするには、単句（対句をなさないもの）であるよりは、対句であるほうが便利である。口誦するのにリズムも快調であり、記憶するのに便利である。対句を組成する両句が互いに支え合って、双方が互いに他を呼び合うため、一句からほかの一句が想起されることは、記憶するのに便利な条件である。語録の資料が記憶や口誦の伝達にたよるために、それに適した表現形態に定着してきたのであって、対偶表現もその一環として考えるべきである。

とある（「論語の対偶表現」12頁32行～13頁4行）。この「記憶口誦の観点から見た単句に対する優位性」は対偶表現そのものが持つ「特長」であるといってよいだろう。古田氏は「論語の対偶表現」の全編にわたってこの口誦の利便性を強調している。また、『中国文学における対句と対句論』330頁1～6行においても、

四字乃至五字一句の中で、わずかに一字を入れ替えるだけで、他は全く同じ表現の繰返しである。これは後世の修辞意識からすれば、全く例外的句法と言わざるを得ない。美文意識というものが、まだ確立していなければこそ許される表現である。たといそれが倫理を説く文章であっても、後世になれば苟くも文章である以上は許されないことであろう。

こうした、文章表現としては無味乾燥な形式も、口誦には便利であったと思われる。修辞意識のほとんどない時代における、実利的表現形態ということができよう。

四

とあるように、「記憶口誦の観点から見た対句・対偶表現の優位性」は、後世の中国文学成立以前の『論語』編纂期のような時期に対句・対偶表現が使われたメリットとして特に重視されてきたと考えている。おそらくそのこと

において疑問をさしはさむ必要はないだろう。

さて、『論語』の対句には、どのような特徴があるのだろうか。「論語の対偶表現」24頁18～19行に、「内容的には正対・反対の両者があり、形式的には繰返型・交錯型・尻取型等があるが、繰返型が特に多い。」とある。繰返型・交錯型・尻取型のそれぞれについて古田氏の分析を簡単にまとめると、次のようになる。繰返型は、同じ文字の重出や、共通点を持ったキーワードを持つ語を含むという特徴を持つ句のまとまりであり、対句・多句対（三句以上が対句形式になっていると認められるもの）がある。交錯型は、「君子」と「小人」や「君」と「臣」など、結びつきの強い語句を用いて作られた、である。尻取型は、前の句の最後の語句を次の句の最初に出すことで、つながりを持たせた対句・多句対である。

総合すると、もし「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」を対句、あるいは対偶表現であると仮定するならば、「反対式交錯型の対句」とみるのが自然であろう。それは、『論語』そのものが持つ意義と、それを表すために使われた修辞を照らし合わせてみるとよく分かる。「論語の対偶表現」16頁1～8行に、

論語という書物は「君子」の道を説くのが、その中心眼目であるから、この対偶は論語の対偶の中でも重要性を持つものと言わねばならない。(中略)「君子」の道を説くのが目的であるから、「君子」だけについて論ずればよさそうであるが、「君子」だけを説いたものは十例にとどまる。「君子—小人」と二元的に二つのものを対照させて、「君子」の道を説くところに、中国的発想の鍵があると思う。

と述べたうえで、さらに「論語の対偶表現」16頁33行～17頁2行において、

「君子」と「小人」の言行状態は完全に反対なのである。その表現は全くうらはらになっている。即ち「君子」で肯定されたものは「小人」では否定され、「君子」で否定されたものは「小人」では肯定されているのである。(中略)

「君子」だけを語った場合、即ち孔子の言葉として「小人」については語られてないときでも、その言葉を発する者、又その言葉を聞く者は、背後に「小人」の言行を思い浮かべているのではないかと思われる。(中略)「君子」とか「小人」とかの一方を考えると、尤も論語には「小人」だけを語る章はないけれども、常にその対極としての他の一方を設定して意識するのである。

と述べている。つまり、口誦効果だけでなく、意味上想起しやすくするために、『論語』において対句的技法は使われている、とするのだ。それは古代から現代に至るまで、およそ『論語』を学び、研究する者たちにとっても、多かれ少なかれこの仕組みの影響を受けている、ということは否定できるものではない。

筆者は冒頭に『論語』は孔子が人はいかに生きるべきか、どのようにすれば政治がうまくいくのかななどを説いた書であると述べた。そしてそのなかで最も重要な要素であり、君子が具備するべき要素が「仁」であることは、ことさらに議論をすることではない。そして「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」は、いずれも「仁」について述べられた章句なのである。また、一方は否定的な文章という印象を受けやすく、もう片方は肯定的な文章であるという印象を受けやすい。また、一見すると両章句は、交錯型における言葉の結びつきが認められ得るようにみえるし、片方を述べればもう片方を想起しやすい形になっている。ゆえに、もし「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」を対句、あるいは対偶表現であると仮定するならば、「反対式交錯型の対句」とみるのが自然であると考えられるのである。しかしこれはあくまで仮定であることに注意しておきたい。

そこで次の章では今まで述べてきた対句・対偶に関する考え方を基に、本題となる二章句の比較へと移りたい。

2 二章句の構造

第1章では、『論語』における対句・対偶表現論についてみていき、一応の仮定を置いた。第2章では「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」それぞれの注疏を読み下し、意味を把握していく作業をしていく。

2-1 巧言令色鮮矣仁

まずは章句を読み解き、注疏を検討していく。「巧言令色鮮矣仁」は学而第一・3章および陽貨第十七・15章と、『論語』中に二回登場する。

まず学而第一・3章の記述を見ていく。「論語注疏」5333頁下段B葉10行～5334頁上段A葉3行を引用する。

(本文) 子曰、巧言令色、鮮矣仁。

(読み下し文) 子曰く、巧言令色、鮮なし仁。

(現代語訳) 先生がいうことには、うまい言葉や飾り立てた態度には、仁は少ないのだ、と。

続いて、この章句に対する注疏を読み解いていく。まずは、何晏が行った注の部分のみていく。

(本文) 包曰、巧言、好其言語。令色、善其顔色。皆欲令人説之、少能有仁也。

(読み下し文) 包曰く、巧言、其の言語を好む。令色、其の顔色善し。皆人説ばしむるを欲し、能く仁有ること少なきなり。

(現代語訳) (『論語集解』²⁾ の) 包氏³⁾ が言うことには、巧言は、その言葉づかいや言い回しを好むことである。令色とは、外面がよろしいことである。皆が人を喜ばせることを欲することであり、仁は少ないのである。

続いて、邢昺が行った疏の部分のみていく。

(本文)〔疏〕正義曰、此章論仁者必直言正色。其若巧好其言語、令善其顔色、欲令人説愛之者、少能有仁也。

(読み下し文) 正しき義に曰く、此の章仁者必ず直言正色なるを論ず。其の若し其の言語の巧みさを好み、其の顔色を善しとしむる、欲令人説愛之者、能く仁有ること少なきなり。

(現代語訳)〔疏〕義に正しくして言うと、この章は、仁者は必ず直言正色であることを論じている。これがもし言葉づかいや言い回しを好んだり、極度に外面をよくしたりしようとするならば、誰もがそれを(表面の良さのみで)好んでいくため、仁は少ないのである。

続いて、「論語注疏」における陽貨第十七・15章の注疏の記述をみていく。5485頁上段B葉4行～5行に、

(本文) 王曰、巧言無実令色無質。〔疏〕子曰巧言令色鮮矣仁。正義曰、此章與学而篇同弟子各記所聞故重出之。

(読み下し文) 王曰く、巧言実無く令色質無し。〔疏〕子曰く巧言令色鮮なし仁。正しき義に曰く、此の章と学而篇、同弟子各記所聞故に重出す。

(現代語訳) (『論語集解』における) 王氏⁴⁾がいうには、巧言には実体がなく、令色には質がない。〔疏〕子曰巧言令色鮮なし仁。義に正しくして言うと、この章と学而篇の章は同じく弟子がそれぞれ聞いたところを記述しているため重出している。

とある。

2-2 剛毅木訥近仁

前節と同じく、まずは章句を読み解く作業をする。「論語注疏」の引用箇所は5447頁下段B葉1行～4行である。まず本文は、

(本文) 子曰、剛、毅、木、訥、近仁。

(読み下し文) 子曰く、剛、毅、木、訥、仁に近し。

(現代語訳) 先生がいうことには、我慢強い態度や口数が少ないさまは、仁に近い、と。

となる。続いて、この章句に対する注疏を読み解いていく。まずは、何晏が行った注の部分のみていく。

(本文) 王曰、剛無欲、毅果敢、木質樸、訥遲鈍。有斯四者、近於仁。
 (読み下し文) 王曰く、剛は無欲、毅は果敢、木は質樸、訥は遅鈍なり。斯の四者有り、於いて仁に近し。
 (現代語訳) 王氏がいうことには、剛は無欲のことであり、毅は果敢のことであり、木は質樸のことであり、訥は遅鈍のことである。この四者を備えていることは、仁に近いといえる、と。

続いて、邢昺が行った疏の部分のみていく。

(本文) 正義曰、此章言有此四者之性行、近於仁道也。仁者静、剛無欲亦静、故剛近仁也。仁者必有勇、毅者果敢、故毅近仁也。仁者不尚華飾、木者質樸、故木近仁也。仁者其言動也訥、訥者遲鈍、故訥近仁也。
 (読み下し文) 正義に曰く、此の章此れ四者の性行仁道に近く有るを言ふ。仁者静なり、剛無欲にして静なり、故に剛仁に近し。仁者必らず勇有り、毅は果敢なり、故に毅仁に近し。仁者なお華飾せず、木は質樸なり、故に木仁に近し。仁者其の言動訥なり、訥は遅鈍なり、故に訥仁に近し。
 (現代語訳) 義を正しくして言うと、この章はここで提示した四つの性質が仁に近いということを述べた文章である。仁者は静かだ。剛は無欲で静かである。よって仁に近い。仁者は必ず勇気を持つ。毅は果敢であることを示す。よって仁に近い。仁者は過剰な修飾をしない。木は質樸である。よって仁に近い。仁者の言動は訥(ジン)である。訥は遅鈍である。よって仁に近いのである。

3 「巧言令色」と「剛毅木訥」

第3章では、二章句の前半部分にあたる「巧言令色」と「剛毅木訥」について、対義語として成立しているのか検証していく。

まず、「論語注疏」の邢昺は「巧言令色」を、

(本文)〔疏〕正義曰、此章論仁者必直言正色。其若巧好其言語、令善其顔色、欲令人説愛之者、少能有仁也。

としており、「巧言」「令色」に分けて論じている。また、「剛毅木訥」を、

(本文)正義曰、此章言有此四者之性行、近於仁道也。仁者静、剛無欲亦静、故剛近仁也。仁者必有勇、毅者果敢、故毅近仁也。仁者不尚華飾、木者質樸、故木近仁也。仁者其言動也訥、訥者遲鈍、故訥近仁也。

と説明しており、「剛」「毅」「木」「訥」としている。

つぎに宦懋庸『論語稽』（『續修四庫全書 157』上海古籍出版社、1995）368頁、5～6行には、

(本文)剛毅近於高明、木訥近於沈潜、雖各得一偏、然絶無取巧習氣、故曰近仁。若夫巧言令色、與不貧私鄙吝之爲病、則去仁遠矣。

(読み下し文)剛毅は高明に近し、木訥は沈潜に近し、各一偏を得んと雖も、然して巧習して氣取ること絶無なり、故に曰く仁に近し。若し夫れ巧言令色ならば、私の不貧と鄙吝の病と為す、則ち仁遠く去らん。

(現代語訳)剛毅は高明に近く、木訥は沈潜に近い。それぞれどちらかを習得したとしても、それは正しく習得したことにはならない。ゆえに仁に近いという。もしそれが巧言令色の気質であるならば、私腹をこやして、それでいて狭量でけち臭い小人特有の気質となり、仁から遠く去ることになるだろう。

とあり、「巧言令色」を「巧言」「令色」に、「剛毅木訥」を「剛毅」「木訥」としている。

つぎに、洪邁・著『容齋隨筆』（『四庫全書 851』上海古籍出版社、1980）286 頁、4～6 行によれば、

（本文）剛毅近仁

剛毅者必不能令色。木訥者必不爲巧言。此近仁鮮仁之辨也。

（読み下し文）剛毅仁に近し

剛毅は必ず令色に能はざる。木訥は必ず巧言を爲さず。此れ近仁鮮仁の弁なり。

（現代語訳）剛毅仁に近し

剛毅であることは必ず顔色を善くすることはない。木訥の気質を持つ者は巧言を爲すことではない。これが仁に近い、仁少ないの弁証である。

としており、宦懋庸の意見と同じく「巧言令色」を「巧言」「令色」に、「剛毅木訥」を「剛毅」「木訥」としている。

つぎに、荻生徂徠著・小川環訳注『論語徴 2 東洋文庫 576』（平凡社、1994）179 頁、3～14 行には、

王肅曰く、「剛は無欲、毅は果敢、木は質樸、訥は遲鈍」と（古註）。楊氏（朱註に引く）曰く、「剛毅なるときは則ち物欲に屈せず、木訥なるときは則ち外馳に至らず」と。皆非なり。（中略）「剛毅木訥」は、けだし古への成言にして、剛毅の人は、多く是れ質樸にして言に拙し。ゆゑに「剛毅は木訥」と曰ふ。猶ほ巧言の必ず令色を帯びてこれを言ひ、しかうして重んずる所は巧言に在るがごとき耳（のみ）。（中略）後儒析きて以て四と爲し、而うして剛は何を以ての故に仁に近く、毅は何を以ての故に仁に近く、木と訥はおのおの何を以ての故ぞと謂ふ者は、皆な古言を識らざる耳。

とある。つまり荻生徂徠は、剛毅と木訥とは不可分の関係であり、また巧言

と令色とは不可分の関係である、と主張している。また、引用部前段において一字ずつ分けて分析する学説も二字ずつ分ける学説も「古言を識らざる」と一蹴している。

特徴としては「巧言令色」については「巧言」「令色」の分け方のみであることがわかる。これは「巧」「令」だけでは意味が通じないからである。しかし、「剛毅木訥」については「剛毅木訥」を、邢昺は「剛」「毅」「木」「訥」と一字で分けるのに対し、宦懋庸や洪邁は「剛毅」「木訥」と二字で分けていることがわかる。これは、「巧言令色」と違い、「剛毅木訥」は一字句としても二次句としてもほぼ同様の意味としてとらえることができるからである（【表1】）。

したがって二つの四字句は、別々の意味構造を持っている。この二章句を対句としてみた場合、いかに『論語』が対句理論の確立化以前の素朴な形態の対句法を行っているからといって、文章としては明らかな欠陥ともいえるこの四字を、礼を重視し乱れた名を改めようと主張した孔子や、孔子の死後『論語』を編纂した弟子がそのままにするだろうか。これは大きな疑問であると言わざるを得ない。まずこの点において、「巧言令色」と「剛毅木訥」の二つは比較するには不適當であるといえよう。

また、それぞれの単語の意味を考えていき、それを図式化したものが【表1】である。これを見ていくと、「巧言（言葉巧みである）」と「木訥（口下手である）」については〈弁舌が上手であるか否か〉という観点でみることができるため、対義語として認められるだろう。また、「令色（過剰に飾り立てた態度）」と「木訥（飾りっ気がない態度）」は、〈飾りっ気があるか否か〉という観点から考えた場合、完全な対立としてみることもできるであろう。しかし、「巧言」と「剛毅」（表面上繕いながら心は屈しない、ということはある得る）、「令色」と「剛毅」（同上）、の二組に関しては指し示す内容が対立として符合せず、論理的対立を起こしているとはいえない、ということがわかる。これは対偶表現を作るうえで致命的な欠陥であると言わざるを得ない。したがって「巧言令色」と「剛毅木訥」とは完全な対義語とは言えない。

4 「鮮矣仁」と「近仁」

第3章では「巧言令色」「剛毅木訥」についてみてきた。第4章では、二章句の後半部分にあたる「鮮矣仁」と「近仁」について、特に「鮮」「近」の字について注意しながらみていくことにする。

また、『論語』と同じく『十三経』に収録されている、古代の漢語事典ともいべき書物である『爾雅』も参考にしていく。底本は『論語』と一緒に本に収録されている「重栞宋本爾雅注疏附按勘記（嘉慶二十年広西南昌府學開雕）」『十三経注疏 七 論語 孝經 爾雅 孟子』（中文出版社、1971、以下「爾雅注疏」）である。

まずは「鮮」字について、確認しておきたい。

「鮮」字は、許慎『説文解字』（中華書局、2013）244頁、2行および段玉裁『説文解字注』（藝文印書館、1966）585頁、8行、魚部によると、

魚名、出貉國、从魚、善省聲

とある。また、「爾雅注疏」釋詁下、5597頁上段A葉2行～5行に、

（本文）希、寡、鮮、罕也。罕、亦希也。謂少。鮮、息淺切。〔疏〕釋曰皆簡少之稱也。論語云希不失矣。（以下別文献の解釈文のため省略）
（読み下し文）希、寡、鮮、罕なり。罕、また希なり。謂う少なし。鮮、息淺の切なり。〔疏〕釋に曰く皆簡少の稱なり。論語に云う希失はず。
（現代語訳）希、寡、鮮、の意味は罕である。罕は、また希の意味を持つ。少ないということである。鮮は、息・淺の反切である。〔疏〕釋によると、度の漢字もみな少ないという意味を持つ感じである。『論語』においては希を失わないという意味もある。

とある。『説文解字』においては、魚の一種の名前であるとのみ表記されており、それ以上の記述は無い。また「爾雅注疏」においても「少ない」という意味で使われていることだけ記述されている。

そして「黜(ごくわずか)」という字に字義上通じていくことで、ここで「すくない(少ない)」という意味が付与される。否定的表現として使われているが、「不」「無」「非」といった否定詞と違い、形容詞である。そして対義語としては、「多」がある。つまり、「鮮」は仁の量の多寡を形容しているわけであり、「(仁が)まったくない」とは言っていないし、まして「(仁)から遠い」ことを指し示すわけでもない。

「近」字は、許慎『説文解字』(中華書局、2013) 35 頁、32 行および段玉裁『説文解字注』(藝文印書館、1966) 74 頁、32 行、辵部によると、

附也、从辵、斤聲

とある。「爾雅注疏」釋詁下、5601 頁上段A葉4行～5行に、

(本文) 邇、幾、暱、近也。

(読み下し文) 邇、幾、暱、近いなり。

(現代語訳) 邇、幾、暱、の意味は近である。

とあるのみであり、わざわざ説明を入れるまでもない字としているようだ。「近」は形容詞であり、古代の使われ方と現代での使われ方に大きな差異は見られない。そして言うまでもないが「近」の対義語は「遠」である。つまり、「近」は仁に近いかどうかのみを形容している表現であり、仁が含まれているかどうかまでは表していない。

この字義から考察してみると、「鮮」字には「少ない」という意味はあるが、「遠い」という意味は存在しないことがわかる。また、「近」字は「鮮」字との対義語とは言えない。ゆえに、「鮮矣仁」と「近仁」も対立する概念であるとは言えない、ということが演繹できるであろう。

5 小論で取り上げた各注釈書・研究書の主張とそれに対する反論

「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」の比較について、その妥当性の分析については第3章および第4章で検討した通りである。しかし、「巧言令色」と「剛毅木訥」を直接比較したり、「鮮」を「遠」として注釈したりしている注釈書・研究書は存在している。ここでは数多ある注釈書・研究書の中でもその傾向が強い注釈書・研究書である『容齋隨筆』『論語稽』『論語微』を引き続き検討する。

洪邁・著『容齋隨筆』（『四庫全書 851』上海古籍出版社、1980）286頁、4～6行によれば、

（本文）剛毅近仁

剛毅者必不能令色。木訥者必不爲巧言。此近仁鮮仁之辨也。

とある。こちらは巧言令色という語も使い、かつ「近」と「鮮」とを併記して直接比較している。

宦懋庸『論語稽』（『續修四庫全書 157』上海古籍出版社、1995）368頁、5～6行によれば、

（本文）剛毅近於高明、木訥近於沈潛、雖各得一偏、然絕無取巧習氣、故曰近仁。若夫巧言令色、與不貧私鄙吝之爲病、則去仁遠矣。

とある。この文章では剛毅木訥を説明するに際し、巧言令色を比較に用いて説明している文章である。注目すべきは、「巧言令色～則去仁遠矣」の部分である。つまり、この文章は、「巧言令色は仁から遠く去る性質を持つものだ」ということを前提にして考えられている文章である。言い換えるならば、巧言令色が仁から遠く去る性質を持っているから、剛毅木訥の反義語として成り立たせることができ、比較しているのだ、ということになる。

荻生徂徠著・小川環訳注『論語微2 東洋文庫 576』（平凡社、1994.）179頁、

7～9行には、

「剛毅木訥」は、けだし古への成言にして、剛毅の人は、多く是れ質樸にして言に拙し。ゆゑに「剛毅は木訥」と曰ふ。猶ほ巧言の必ず令色を帯びてこれを言ひ、しかうして重んずる所は巧言に在るがごとき耳（のみ）。

とあり、さらに荻生徂徠著・小川環訳注『論語徴1 東洋文庫575』（平凡社、1994）28頁6行～30頁4行には、

仁者の必ず佞ならざるを見（あらは）すなり。「鮮矣仁（仁なること鮮し）」は猶ほ鮮乎仁と言ふがごとし。仁者は何を以てか佞ならざる。（中略）仁に志ざす者（里仁篇）はあに言色の末に及ぶに違あらん哉。是れ其の志ざす所の大きいなるが故なり。

とあり、仁者は志が高く言葉の美のみに執着する暇がないから結果的に仁者は佞、つまり弁舌の良好さを持たないとする。また、巧言令色は志の低い者が行う乱れに過ぎず、その一端を認めている孟子や朱熹を批判している。

さて小論の立場としては、すべてに反論したいと思う。まず『容齋隨筆』は「剛毅」と「令色」、「木訥」と「巧言」をそれぞれ対立させて述べているが、3節で考え調べた限りでは、少なくとも「剛毅」と「令色」に対しては完全な対立であるとは言えない。また、「近仁鮮仁」と比べて書くことは、一見すると〈「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」を並べて考えており、前段で剛毅木訥と巧言令色を分解して考えているのだから、そこだけ集約されるのは当然である〉というもっともらしい記述の方法にも思えるが、字義に則して考えれば対立項でもない近と鮮とを並べようとする試み自体がナンセンスである。むしろここで「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」を比較すること自体の違和感に気付くべきであっただろう。

『論語稽』は、鮮矣仁となるべき個所を「則去仁遠矣」と言い換えている。一見違和感のない文章である。ただし、第4節で考え調べたところ、「鮮」

字には「遠い」という意味は持ちえない。ゆえに論理が飛躍してしまっているといえるだろう。もし宦懋庸がいうように、巧言令色は仁から遠くなってしまうような要素である、というのであれば、『論語』本文で「巧言令色遠仁」などというように、「鮮」字ではなく「遠」字が使われてなければならない。「遠」字は『論語』内でも、述而第七・29章に、

(本文) 子曰、仁遠乎哉。我欲仁、斯仁至矣。

(読み下し文) 子曰く、仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯仁至れり。

(現代語訳) 先生が仰った、仁は遠いということはあるだろうか、私が仁を欲すれば、ここで仁に至ることもできるのに。

のように使用されていることから、「遠」字が無かった、あるいは使用できなかった、ということはない。「鮮」字は明らかに「遠」とは全く違う意図を以て使われている語なのである。

『論語微』に対しても反論ができるであろう。仁者は必ず佞、つまり弁舌に長けていることはない、と断じているのである。荻生徂徠はこのことについて、仁者は志が高く言葉の美のみに執着する暇がないからである、と論ずる。しかし、対義語として念頭に置いている「剛毅木訥」の解釈において、「剛毅の人は、多く是れ質樸にして言に拙し。」と、多くと言及しており、完全に会得していると断定していないことがわかる。

結

小論では、「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」の二章句について解釈検討していき、この二章句は比較することが可能なものか否か、〈「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」は「反対式交錯型の対句」である〉という仮説を立てつつ、それを否定していくという、論理学における背理法のような手法で検証をしてきた。

最初の検討手段である「巧言令色」と「剛毅木訥」の比較についてである

が、二つの四字句は、別々の意味構造を持っているといえるため、この二章句を対句としてみた場合、文章としては明らかな欠陥ともいえるこの四字を、礼を重視し乱れた名を改めようと主張した孔子や、孔子の死後『論語』を編纂した弟子がそのままにするだろうか。これは大きな疑問であると言わざるを得ない。また、二字句同士の意味の対照を行ったところ、四組中二組が指し示す内容が符合せず、論理的対立を起こしているとはいえ、対偶表現を作るうえで致命的な欠陥を抱えていることがわかった。したがって「巧言令色」と「剛毅木訥」とは完全な対義語とは言えないという結論に至った。

次の検討手段である「近仁」と「鮮矣仁」の比較についてであるが、字義から考察してみると、「鮮」字には「鮮」は仁の量の多寡を形容しているわけであり、「(仁が)まったくない」とは言っていないし、まして「(仁)から遠い」ことを指し示すわけでもない。また、「近」字は古代の使われ方と現代での使われ方に大きな差異は見られず、対義語は「遠」である。つまり、「近」は仁に近いかどうかのみを形容している表現であり、仁が含まれているかどうかまでは表していない。ゆえに「鮮」字との対義語とは言えない。「鮮」字と「近」字が対義語として成立しない以上、「鮮矣仁」と「近仁」も対立する概念であるとは言えない、ということが演繹できるであろう。

また、仮に「巧言令色鮮矣仁」「剛毅木訥近仁」の二章句が対偶表現であるというならば、『論語』編纂期において、同じ章・同じ巻に入れるという編集がなされていなければならない。それは、『論語』編纂上大きな助けになったはずであろう対偶表現の「記憶口誦に便利である」という特長が効果的に機能しないからである。しかし『論語』が、今日我々が見ることが出来る状態に至るまで、この二章句は同じ章はおろか、同じ巻にさえ収録されていないのである。しかも「巧言令色鮮矣仁」に至っては『論語』本文中に二回もでていのにである。これは対偶表現の特長である記憶口誦を放棄していると言わざるを得ず、結果としてこれをわざわざ対偶表現であるということや、対句的に研究することは不自然であるといえるのである。

「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」は、おそらく孔子やその弟子たち、少なくとも『論語』を編纂するころまでの弟子たちにとって、別々の意図を持った独立した章であると考えられていたのであろう。ならば、それぞれ単

体で検証すべき章句である。つまり仮定で挙げたような「反対式交錯型の対句」のように比較するにはふさわしくない章句であり、『論語』の「巧言令色鮮矣仁」と「剛毅木訥近仁」を根拠とした語句としての「巧言令色」「剛毅木訥」の二つについても対義語として扱うべきではないだろう、というのが小論の結論とするところである。

ちなみに、小論の理論および結論から考えると、「鮮」という字を、『論語』でも使われている「不」「非」「無」などの完全否定を表す語句ではないのに(孔子に限って言えば「仁」に対して「非」も使っていない、それほどまでに孔子は字に対してかなり注意深い態度で取り扱っていたといえる)、あえて孔子が使っている以上、「巧言令色」には仁がまったく含まれていない、とはいきれないことが明らかとなったといえる。そのため、諸橋轍次著『大漢和辞典 巻四』(大修館書店、1957) 367 頁 31 行～36 行にある「巧言令色」の項の説明文である、

たくみにしゃべり、顔色を善くしてこびへつらう不仁者のさま。(中略)
〔論語、学而〕巧言令色鮮矣仁。(後略)

という記述は、不可解であると言わざるを得ない。「不仁者」に含まれている「不」と「鮮」とは全く違う意味と運用法を持つ言葉であり、「巧言令色鮮矣仁」が指し示すさまと「不仁者」が指し示すさまとは趣が異なるからである。

註

- 1) 例えば、日本において漢字について一定の影響を持つ日本漢字能力検定協会が発行している『漢検 四字熟語辞典第二版』(2013)の「巧言令色」の項目において、剛毅木訥が対義語として表示されている(190頁)。また、「剛毅木訥」の項目において、巧言令色が対義語として表示されている。その由来・出典として『論語』の同文章が引かれている(189頁)。
- 2) 『論語集解』は、何晏(193?～249)の著書で、『論語』の注釈書。漢～魏の注釈を抜粋、編集したうえ、自らの解釈を加えている、代表的な

古注の書である。

3) 包氏とは、『論語集解』の包咸 (B.C.6 ~ 57) のこと。

4) 王氏とは、『論語集解』の王肅 (195 ~ 256) のこと

底本・資料

伊藤仁斎著・佐藤正範編『論語古義』(合資会社東京六盟館、1909)

段玉裁『説文解字注』(藝文印書館、1966)

「重栞宋本論語注疏附按勘記 (嘉慶二十年広西南昌府學開雕)」『十三經注疏
七 論語 孝經 爾雅 孟子』(中文出版社、1971)

「重栞宋本爾雅注疏附按勘記 (嘉慶二十年広西南昌府學開雕)」『十三經注疏
七 論語 孝經 爾雅 孟子』(中文出版社、1971)

洪邁・著『容齋隨筆』(『四庫全書 851』上海古籍出版社、1980)

荻生徂徠著・小川環訳注『論語徴 1 東洋文庫 575』(平凡社、1994)

荻生徂徠著・小川環訳注『論語徴 2 東洋文庫 576』(平凡社、1994)

宦懋庸『論語稽』(『續修四庫全書 157』上海古籍出版社、1995)

許慎『説文解字』(中華書局、2013)

日本漢字能力検定協会『漢検 四字熟語辞典第二版』(2013 第二版発行)

参考文献

古田敬一「論語の対偶表現」『支那学研究 第 36 号』(12 ~ 24 頁、広島支
那学会、1972)

古田敬一『中国文学における対句と対句論』(風間書房、1982)

図表【表1】

| 巧言令色 | |
|--------------|---------------|
| 巧い言葉や飾り立てた態度 | |
| 巧言 | 令色 |
| 言葉をつくろい飾る | 顔色や態度を過剰によくする |

| 剛毅木訥 | | | |
|-----------------|-------|--------------|-------|
| 我慢強い態度や口数が少ないさま | | | |
| 剛毅 | | 木訥 | |
| 心が強く、屈しない | | 口才がなく、飾り気がない | |
| 剛 | 毅 | 木 | 訥 |
| 無欲である | 果敢である | 質樸 | 言語の遅鈍 |